



「聖餐」のための七つの瞑想

テキスト

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6章 53～58節、63節

- 53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。
- 54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。
- 55 わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。
- 56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。
- 57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。
- 58 これは天から下って来たパンです。あなたがたの父祖たちが食べて死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」
- 63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことは、霊であり、またいのちです。

●ヨハネは上記の箇所において「聖餐」の意味を明瞭に記しています。聖餐におけるパンとぶどう酒は、永遠のいのちの世界を指し示す象徴です。目に見える「パン」を食べ、「ぶどう酒(液)」を飲むことを通して、その奥に秘められている神と人との霊的ないのち(交わり)の世界を、信仰によって味わうことが求められています。瞑想はその霊的なかわりの現実を、ことばに置き換えて理解しようとする試みなのです。

聖餐の瞑想のための七つのテーマ

- (1) 「人の子」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53 節
- (2) 「肉を食べ、血を飲む」・・・・・・・・・・・・ 54 節
- (3) 「永遠のいのち」・・・・・・・・・・・・・・ 54 節
- (4) 「まことの」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55 節
- (5) 「とどまる」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56 節
- (6) 「生きる」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57, 58 節
- (7) 「御霊」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63 節

「聖餐」のための七つの瞑想

1. 人の子

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6章 53節

イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。**人の子**の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

- イエシュアが語られた聖餐のメッセージ(ヨハネ 6:53~58)の中から最初に取り上げる瞑想のテーマは、「人の子」です。イエシュアはご自分のことを「人の子」と言われました。それは「メシア」の称号でもあります。「人の子」はヨハネの福音書で 14 回使われています。6章にある「パンの奇蹟」の後で語られた一連のメッセージの中では、3回(6:27, 53, 62)使われています。イエシュアはどのような意味でこの「人の子」という称号を用いたのでしょうか。

(1) 「人の子」としてのイエシュアの二つの面

- 「人の子」の称号には二つの面があります。一つは「死すべき弱き人間」としての「エノーシュ」という面と、もう一つは「第二のアダム」としての「ヴェン・アーダーム」という面です。この二つの面をもったイエシュアの口から語られたメッセージから、今回は七つの語彙を取り上げ、その一つひとつを味わおうとしています。
- 詩篇 8 篇は、ダビデが神からの啓示を受けて歌った預言的詩篇であると同時にメシア詩篇でもあります。メシア詩篇であるということは、そのことが新約聖書において引用され、あかしされています。詩篇 8 篇の中に次のようなフレーズがあります。

【新改訳改訂第3版】詩篇 8 篇 4~6 節

4 人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。

人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。

5 あなたは、人を、神よりいづらが劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。

6 あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。

- 4節は同義的パラレリズムです。つまり、「人」と「人の子」とは同じ存在であるということです。「人」は「エノーシュ」(אֲנוּשׁ)、**「人の子」**は「ヴェン・アーダーム」(בְּנֵי אָדָם)で表されます。「人」と「人の子」がイエシュアを指し示しているとするならば、イエシュアは「死すべき弱さをもった存在」としての「エノーシュ」の面と、神の造られたすべてのものを治める存在として創造された人である本来の「アーダーム」(אָדָם)が回復された存在、つまり「第二のアダム」である「ヴェン・アーダーム」の面を合わせ持っているということになります。この二つの面を合わせ持っていることが重要なのです。

- ヘブル人への手紙の著者はこの詩篇 8 篇 4~6 節を注解して、以下のように記しています。

「聖餐」のための七つの瞑想

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙2章6～10節、14～15節

- 6 むしろ、ある個所で、ある人がこうあかしています。「人間が何者だというので、これをみこころに留められる
のでしょ。人の子が何者だというので、これを顧みられるのでしょ。
- 7 あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、
- 8 万物をその足の下に従わせられました」。万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残され
なかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません。
- 9 ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。イエスは、死の苦しみの
ゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたも
のです。
- 10 神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、
万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。
- 14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。
これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、
- 15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

(2) 「エノーシュ」(צִיּוֹן)としてのイエシュア

●14節に「子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。」とあります。このことを使徒パウロは次のように述べています。キリストは「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」(ピリピ2:7~8)と。このことが意味することは、「その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるため」(ヘブル2:14~15)であつたのです。このように、「神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。」(ヘブル2:10)と述べられています。

(3) 「ヴェン・アードーム」(דְּוִיִּן אָדָם)としてのイエシュア

●ヘブル人への手紙2章10節に、イエシュアのことを「救いの創始者」と記しています。なぜなら、イエシュアは多くの苦しみを通して神が多くの子(人)を栄光に導くことを全うされた方だからです。それゆえ、神は彼に栄光と誉れの冠を与え、万物をその足の下に従わせられました。これが「人の子」(「ヴェン・アードーム」 דְּוִיִּן אָדָם)であり、「第二のアダム」と言われる方です。

●それゆえ今も、イエシュアは天の神の右の座において「人の子」と呼ばれているのです。初代教会の最初の殉教者となったステパノは、死の直前に「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられる

「聖餐」のための七つの瞑想

のが見えます。」(使徒 7:56)と、その光景を見えています。この「人の子」である方こそ聖餐の主役であり、今も私たちに語りかけ続けておられることを心に留めたいと思います。

2. 食べる

●「聖餐」のための瞑想(2)は、「肉を食べ、血を飲む」ことです。「食べる」と「飲む」ことは「信じる」ことを意味します。つまり、イエシュアの「肉を食べ、血を飲む」ことは、イエシュアを信じて、イエシュアによって生かされることを意味し、イエシュアのもっているいのちを互いに共有することを意味します。

●ところで、この「肉を食べ、血を飲む」という表現は、多くの群衆や弟子たちをつまずかせる結果となっていました。この世の御利益的なものを求めていた人々はこの話につまずいたのです。この話ほど神の世界において重要な話は他にはありません。イエシュアの肉であるパンを食べイエシュアの流された血であるぶどう酒を飲むことが「聖餐」であり、そこにイエシュアが「人の子」となってこの世に来られたことが集約されているのです。「聖餐」はこの世の人の知恵によっては理解されることのない、いわば神の奥義として隠された神の知恵なのです。

【新改訳改訂3】ヨハネの福音書 6章 53節

イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。」

●「人の子」であるイエシュアが繰り返して語っていることは、「わたしの肉を食べ、その血を飲む」ことです。このフレーズ(54節、55節、そして56節にも)が繰り返されています。不思議なことですが、このテキストの中にある「聖餐用語としての語彙」の中に、以下のように実に多くのヘブル文字「メーム」(מ)が入った語彙があることに気づかされました。これは訳語やギリシア語では見えてきません。ヘブル語に戻って見なければ決して見えないのです。

(1) 終末的食卓用語の中に込められた神の秘密

- | | |
|---------------------------------|--|
| ①「人の子」・・・「ベン・アーダーム」(בֶּן־אָדָם) | ⑤「まことの」・・・「エメット」(אֱמֶת) |
| ②「言われた」・・・「アーマル」(אָמַר) | ⑥「いのち」・・・「ハツイーム」(חַיִּים) |
| ③「肉なる『パン』」・・・「レヘム」(לֶחֶם) | ⑦「永遠のいのち」・・・「ハツイエー・オーラーム」(חַיֵּי עוֹלָם) |
| ④「血」・・・「ダーム」(דָּם) | ⑧「まことに」・・・「アーメン」(אָמֵן) |

●ここで注意していただきたいのは、①～⑧にあるヘブル語にはすべて「メーム」(מ)、あるいは「メーム・

「聖餐」のための七つの瞑想

ソフィート) (מ)の文字が入っているということです。

(2) 聖書の「水」の概念は「真理」と同義

●今回の「ヘブル・ミドゥラーシュ」のテーマ「生ける水の川」で発見した重要な点は、「水」が「真理」と同義語であるということです。ちなみに、「水」はヘブル語で「マイム」(מִיַּם)であり、「真理」はヘブル語で「エメット」(אֱמֶת)です。いずれも、双方に「メーム」(מ)の文字が入っています。「マイム」は、「神の手」を意味する「ヨード」(י)の両サイドに「水」を表わす「メーム」(מ)があります。それは「天にある水」と「地にある水」を示唆しているようにも見えます。一方の「エメット」は、「アーレフ」(א)と「ターヴ」(ת)の間に「水」である「メーム」の文字(מ)が入っています。「水」は聖書においては、天地創造の時から存在しており、かつ新しい天と新しい地においても存在していることで、永遠に変わることはない不変性、普遍性、絶対性を意味しています。つまり、それは「真理」の概念そのものです。あるいは、「エメット」の文字から、「わたしはアーレフであり、ターヴである」方(ギリシア語では「わたしはアルファであり、オメガである」方)が、「永遠のいのちに至る生ける水」を持っていることを指し示しているようでもあります。



水「マイム」(מִיַּם)=真理(「エメット」אֱמֶת)

(3) 「食べる」ことに関する語彙と「メーム」の秘密

●ここで、聖書の中にある「食べる」ことに関する聖句を見ていくと、驚くべきことに、「メーム」(מ)の文字の入った語彙を多く見出すことができます。それについては、ここでは割愛します(興味のある方は「牧師の書斎」をご覧ください)。食卓用語に見られる語彙の中に「メーム」という文字が多くあるのは、偶然なのか、それともそこに神の真理の秘密が隠されているのか、実に興味深いものがあります。

3. 永遠のいのち

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書6章54節

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。

わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

●「永遠のいのち」のギリシア語は「ゾーエー・アイオーニオス」(ζωή αἰώνιος)、ヘブル語は「ハツィエー・オーラーム」(חַיִּי עוֹלָם)と表記します。旧約では1回限りですが、新約では44回使われています。そのなかでも圧倒的に多いのがヨハネの福音書の17回です。

「聖餐」のための七つの瞑想

(1) 「永遠のいのち」とは、「御父」と「御子」を知ること

- 「永遠のいのち」とは何か、それを定義している箇所があります。ヨハネの福音書 17 章 3 節です。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 17 章 3 節

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、
あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

- この箇所以上に「永遠のいのち」を説明している箇所は他にありません。「永遠のいのち」とは、「御父」と「御子」を知ること、そしてそのかわりを「知る」ことを意味します。聖書が教える「知る」とは、知識として知ることではなく、人格的な交わりを通して知ることです。「交わり」の概念の「知る」、それが「いのちを持つ」「いのちにあずかる」ことを意味するのです。その「知る」ことの原初的源は「御父と御子との永遠のかかわり」です。御霊はそのかかわりと深く関係しており、その御霊の現われとしては、地に人の子として来られたイエシュアと天におられる御父とのかかわりを支える方として、イエシュアに寄り添っておられました。ヨハネの福音書 3 章 34 節はこう記しています。「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。」と。

(2) 御父のみこころは、御子を信じる者が永遠のいのちを持つこと

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6 章 40 節

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。
わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。

- ここには御父のみこころが明確にされています。御父が遣わされた御子を見、そして御子が語ることを聞いて信じる者は例外なく、みな永遠のいのちを持つことができるのです。そのためには、朽ちるからだに朽ちないからだに変えられる必要があります。その意味では「からだの復活」が不可欠です。それゆえに、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」とある通りです。「永遠のいのち」と「よみがえり」は切っても切れない関係があるのです。

- イエシュアは「終わりの日」に、ある者たちはイエシュアの空中再臨の時に、ある者たちはイエシュアの地上再臨の時に、「ひとりひとり、よみがえらされる」のです。それゆえ、「使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかし」していました(使徒 4:33)。使徒パウロも、復活のことを絶えず宣べ伝えた一人です。そのパウロがユダヤ人議会でさばきを受けました。その理由をパウロは「私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けている」と述べています(使徒 23:6)。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 3 章 16 節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

「聖餐」のための七つの瞑想

それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

- 「永遠のいのち」を持つことは、死とさばきから免れることの永遠の保障です。「死からいのちに移っている」ことの霊的保障の現実です。このために、神は多大な犠牲を払ってくださったのです。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 5章 39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。

その聖書が、わたしについて証言しているのです。

- この箇所によれば、旧約聖書の中に「永遠のいのち」について証言されていたことが分かります。そしてその「永遠のいのち」は御子イエシュアと深い関係があることが証言されていたのです。

(3) 私たちが「永遠のいのち」を持つためにすべきこと

① イエシュアの与える水を飲むこと

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 4章 14節

しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。

わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

② イエシュアのことばを聞いて、イエシュアを遣わした方を信じること

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 5章 24節

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、

永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

4. まことの

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6章 55節

わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。

- 「まことの」と訳されたギリシア語「アレーセース」(ἀληθής)は形容詞です。それは「本当の」「真実の」「誠実な」とも訳されます。隠されずに現われている事実に即したことを意味します。この世には、まがいものや不完全なものが満ちています。なぜならこの世は「偽りの父」(サタン)が支配しているからです。「偽り」とはすべてのものが偽りということでは決してありません。本物の事柄の中にわずかな毒を混ぜることによって「偽物」を「本物」だとだましてしているのです。ですから多くの人はそのことに気づきま

「聖餐」のための七つの瞑想

せん。イエシュアが「まことに、まことに」(אמת אמת)と言って語らなければならないほどに、「本物」を知ることも、「本物」に出会うことも難しいのです。「アレーセース」(ἀληθείς)はヨハネの特愛用語です。26回のうちその半数以上である14回がヨハネの福音書にあるからです(3:33/4:18/5:31, 32/6:55, 55/7:18/8:13, 14, 17, 26/10:41/19:35/21:24)。

●名詞の「まこと」は「真理」「真実」と訳されます。ギリシア語は「アレーセイス」(ἀλήθεια)、ヘブル語は「エメット」(אמת)です。キリスト教は「アーメン」の宗教だと言われますが、その通りです。「アーメン」はヘブル語の「真実」を意味する語彙「アーメン」(אמת)です。「神の真実」は、神が約束されたことは決して反故にされることはなく、必ず実現されるということに表されます。使徒パウロは「私たちは(主にに対して)真実でなくても、彼(=イエシュア)は(私たちに対して)常に真実である(あり続ける)」(Ⅱテモテ 2:13)と述べています。

(1) 「まことの」方であるイエシュア

●イエシュアは「主である」ことと、そして「まことの方」であることは同義です。なぜなら、イエシュアは「父のみもとから来られた方」であり(ヨハネ 1:14)、「父のふところにおられるひとり子」(ヨハネ 1:18)だからです。その方だけが神のことを説き明かすにふさわしい方だからです。

(2) イエシュアのおかしを受け入れた者は、神が真実であることを確認する

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 3章 32～33節

32 この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。

33 そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。

5. とどまる

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6章 56節

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちに**とどまり**、わたしも彼のうちに**とどまります**。

●「とどまる」はギリシア語の「メノー」(μένω)の現在形で、「とどまり続ける」の意。「とどまる」は「メノー」(μένω)、英語では、abide, remain, dwell, continue と約束されます。「とどまる」とは、**きわめて深い関係性**を表わす語彙です。旧約聖書でこの関係性を表わしている箇所を挙げるとすれば、詩篇 15 篇 1 節、詩篇 91 篇 1 節がそうです。いずれも詩篇も、同義的パラレリズムで記されています。

【新改訳改訂第3版】詩篇 15 篇 1 節

【主】よ。だれが、あなたの幕屋に宿る(「グール」גור)のでしょうか。

だれが、あなたの聖なる山に住む(「シャーハン」שכן)のでしょうか。

「聖餐」のための七つの瞑想

【新改訳改訂第3版】詩篇 91 篇 1 節

いと高き方の隠れ場に住む(「ヤーシャヴ」**יָשָׁב**)者は、
全能者の陰に宿る(「リーン」**לֵּין**)。

●順に、「宿る」(「グール」**גָּוַל**)、「住む」(「シャーハン」**יָשָׁן**)、「住む」(「ヤーシャヴ」**יָשָׁב**)、「宿る」(「リーン」**לֵּין**)。これらはみな同義語と見なすことができます。そして、これらヘブル語の語彙が、ギリシア語の「メノー」(**μένω**)の中に含まれていると言えます。「とどまる」ことについて、その重要性をイエシュアは最後の晩餐の時に語られました。その教えのことばを引用したいと思います。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 15 章 4～10 節

- 4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。
- 5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。
- 6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。
- 7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。
- 8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。
- 9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。
- 10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。

(1) イエシュアにとどまることで多くの実を結ぶ

●聖餐において、イエシュアの肉を食べ、イエシュアの血を飲む者は、イエシュアのうちに「とどまり」、イエシュアも「彼のうちにとどまります。」(ヨハネ 6:56)とあります。ところが、この相互的な「とどまる」ということがどういうことを理解することは容易ではないのです。霊性の大家アンドリュー・マーレーは「キリストにとどまる」という本の中でこのテーマについて 31 回分の瞑想をしています。つまりそれだけの内容が含まれているということです。

●「とどまる」(新共同訳は「つながる」と訳しています)と訳された「メノー」(**μένω**)は、ヨハネの福音書 15 章だけでも 10 回使われています。「わたしにとどまりなさい」「わたしのことばにとどまりなさい」「わたしの愛の中にとどまりなさい」と表現を変えながら、その「とどまりの形態」を表現しています。いずれにしても、「とどまり、とどまる」というかかわりがあるならば、実を結ぶことができます。しかしこのかかわりがなければ、決して実を結ぶことはできません。イエシュアを離れては、私たちは何もすることができないからです(15:5)。

「聖餐」のための七つの瞑想

●イエシュアの言われる「実」とは何でしょうか。ヨハネの福音書 14 章で語られている「平安」もその実の一つです。15 章 11 節では「喜び」、15 章 12 節では「愛」がそれに加わります。それらはいずれも神の祝福の総称を意味する「シャーローム」(שלום)の側面と言えます。それらは、地上に咲いたキノコのようにです。キノコは地下で縦横に張り巡らしている菌糸がもたらした花です。一つのキノコ(花)が咲くところには、その下には目に見えない無数の菌糸が存在しているのです。一輪の愛の花を、一輪の喜びの花を、一輪の平和の花を咲かせるにも、「キリストにとどまる」隠れた日々の歩みが不可欠です。主は私たちに多くの実を結ばせたいと願っておられます。それゆえ、「わたしにとどまりなさい」という主の招きの声をしっかりと心に刻み、私が主のうちにとどまり、主も私のうちにとどまるという、御父と御子に見られた歩みをさせていただきたいと思います。その新たな気づきを与えられるのも「聖餐」の恵みと言えます。

(2) 「御父」と「御子」のうちに、とどまることの源泉を見ること

●「とどまる」ということがどういう生き方なのかを知るためのヒントとなる知恵は、旧約聖書の中に散りばめられています。その中の一つとして、詩篇 91 篇 1 節の「全能者の陰に宿る」ということを考えてみることは有益です。「宿る」と訳された「リーン」(לִיֵן)の語彙が意味することは、「全能者の陰」とあるように、それは「隠された場」で、いつも一緒に過ごすということです。

●「隠れたところ」とは「シークレット・プレイス」(secret place)で、「宿る」とは神とともに過ごすことです。イエシュアが 12 歳の頃、祭りのためにエルサレムで両親とはぐれてしまいました。その両親に対してイエシュアはこう言われました。「わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」(ルカ 2:49)と。あいにく両親にはこのイエシュアの語られたことばの意味を理解できなかったようです。「シークレット・プレイス」は力の源泉となる場です。そこに自覚的に身を置くことが「宿る」(「リーン」לִיֵן)が意味することです。この「宿る」ことこそ、イエシュアの言う「とどまる」という意味なのです。それゆえ、神殿で教師たちの真ん中にすわって問答しておられるイエシュアの姿を見た人々は、イエシュアの知恵と答えに驚いていたとあります(ルカ 2:47)。イエシュアの両親も息子を見て驚きました。

●この「驚き」は、人々の場合と両親の場合では異なる語彙が使われています。人々の場合には「エクシステーミ」(εξίστημι)が使われ、甚だしく驚く、驚きに打たれる、驚愕する、気が狂うという意味です。両親の場合には「エクプレーツソー」(εκπλησσω)という語彙が使われていますが、「びっくりする、驚愕する、仰天する、(たまげて)啞然となる」という意味です。このイエシュアの姿が「全能者の陰に宿る」者の姿なのです。

●イエシュアはそのような御父とのかかわりを保ちつつ、18 年間隠れた生活をして後に公生涯に入られたのです。このことを思う時、「とどまる」ことの秘密がただ事ではないことが分かります。そのような生活への招きが「聖餐」ごとになされているとするならば、何と私たちは疎い者であるかと思わされます。新しい気づきを与えられる「聖餐」がなされるようにと祈りたいものです。

6. 生きる

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6章 57～58節

57 生きる(※1)父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きている(※2)ように、わたしを食べる者も、わたしによって生きる(※3)のです。

58 これは天から下って来たパンです。あなたがたの父祖たちが食べて死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます(※4)。」

【文法情報】

●「生きる」を意味する四つの「動詞」(「ザオー」 ζάω)。

※1・・・現在形分詞単数(「ホ・ゾーン」 ὁ ζῶν)、分詞は動詞を名詞化したもの。

※2・・・現在形 1 人称単数(「ゾー」 ζῶ)、

※3・・・未来形 3 人称単数(「ゼーセイ」 ζήσει)

※4・・・未来形 3 人称単数(「ゼーセイ」 ζήσει)

●ギリシア語の「ザオー」に相当するヘブル語は「ハーヤー」(הָיָה)、名詞は「ハツヤー」(הַיָּהּ)、その複数形は「ハツイーム」(הַיָּהִים)。形容詞は「ハイ」(יָהּ)。ちなみに、動詞「ハーヤー」(הָיָה)の初出箇所は創世記 3 章 22 節で、「永遠に生きないように」(新改訳)、「永遠に生きる者となる恐れがある」(新共同訳)とあります。善悪の知識の木から取って食べた者はすでに死んだ者です。その死んだ者がいのちの木から勝手に取って食べて永遠に生きることがないように、神は最初の人(アダムとエバ)をエデンの園から追い出しました。死んだ者は神の手続きによらなければ、永遠のいのちにあずかることはできないからです。

●「生きる」と訳される動詞「ザオー」(ζάω)は新約聖書での使用頻度数は 141 回。そのうちヨハネの福音書は 17 回(4:10, 11, 50, 51, 53/5:25/6:51, 51, 57, 57, 57, 58/7:38/11:25, 26/14:19, 19)使われています。

(1) イエシュアのおかげで 生きることができる

●6 章 57 節で、「わたしが父によって生きている」とか、「わたしによって生きる」にある「～によって」と訳されたギリシア語の「ディア」(διὰ)は、「～のおかげで」と訳することができます。つまり、私たちはイエシュアのおかげで生きることができるのです。私たちも何か良いことがあると、人に「おかげさまで」と言うことがあります。そのニュアンスとは異なります。日本語の「おかげさま」の「お陰様」は、特定の人による恩恵を受けていなくても、漠然とした感謝の気持ちを表す挨拶用語です。しかしここでイエシュアが言っていることは、明確な事実に基づいています。その事実とは、イエシュアが御父にとどまっているように、私たちもイエシュアにとどまっていない限り、生きることができないのです。つまり、私たちが「生きる」ことができるのは、イエシュアのお陰様なのです。この方こそ、私たちに「生ける水」や「生けるパン」を与えることができるのです。

(2) イエシュアこそ「よみがえり」「いのち」です

●イエシュアが私たちに「生ける水」や「生けるパン」を与えることができるのは、イエシュアが「よみがえり」であり、「いのち」(ヨハネ 11;25)だからです。ちなみに、この「よみがえり」と訳された語をヘブル語にすると「ハットハッヤー」(הַתְּחַיֶּה)で、「ハーヤー」(הִיָּה)のヒットパエル態の分詞です。「いのち」は冠詞付の「ハハツイーム」(חַיִּים)。 「生きる」と訳された動詞は「ハーヤー」(הִיָּה)の未完了形 3 人称単数形「イフイエ」(יִפְיֶה)です。

●イエシュアはその公生涯において、あらゆる病気をいやし、死んだ者(死にそうな者)を「直し」ました。それはやがて「終わりの日」が来たならば、そうしたことがただちに起こるといふことのデモンストレーションだったのです。イエシュアが再び来られる時には、朽ちることのない新しいからだを与えられてよみがえります。ですから、たとえイエシュアを信じていたとしても、病気がなおらず、あるいは死んだとしても、心配するには及びません。病気がいやされなかったり、あるいは死んだりしても、決して信仰が弱いからではありません。なぜなら、時が来れば、イエシュアを信じる者はたとえ死んでいたとしても「生きる」のですから。以下のみことばを心に留めておきましょう。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 4 章 49~51 節

49 その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来てください。」

50 イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。

51 彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。

●ここではおそらく「死にかけていた」ので、イエシュアは「直っている」と言われたと考えられます。もし「死んでいた」とすれば、イエシュアは「生きています」、あるいは、「眠っているだけです」と言われたのではないかと思います。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 5 章 25 節

25 まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。

そして、聞く者は生きるのです。

●イエシュアの声聞いて信じる者は、「終わりの日」に起こることが信仰によって先取りされて、「生きる」と確約されているのです。この信仰は「神の賜物」です。聖餐にあずかる目的は、私たちがイエシュアによって永遠に生きるためなのです。

7. 御霊

- 「聖餐」についての七つの瞑想の最後の言葉は「御霊」です。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6章 63節

いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。

わたしがあなたがたに話したことは、霊であり、またいのちです。

- イエシュアの語った数々のことば(「レーマ」 ῥήμα)は、霊(「ブニューマ」 πνεύμα)であり、またいのち(「ゾーエー」 ζωή)です。したがって、イエシュアの語ったことを正しく理解する上で、肉は何一つ役に立たない、何の益ももたらさないということです。なぜならイエシュアの語ったことばは私たちの理性では理解できない霊的な事柄だからです。事実、群衆もそして多くの弟子たちもイエシュアの語ったことばにつまずき、「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか。」と言って、イエシュアから離れ去って行きました。これは今日のキリスト者にも言えることなのです。イエシュアの語った霊のことばを理解するためには、聖霊による助けが不可欠なのです。

(1) 目に見えない「いのち」を自ら選び取る

- 聖書には、「祝福」と「のろい」、「いのち」と「死」、「霊」と「肉」という、相反することばがあります。他にも、「救い」と「滅び」、「目に見えるもの」と「目に見えないもの」、「神の知恵」と「人間の知恵」(あるいは「この世の知恵」)などもそうです。私たちはそのいずれかを自ら主体的に選ばなくてはなりません。モーセの訣別説教である申命記の中で、モーセはイスラエルの民に以下のように語っています。

【新改訳改訂第3版】申命記 30章 19節

私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。・・・

- しかし、イスラエルの民を見るなら、「いのちを選ぶ」ことがいかに難しいことかを知らされるのです。イエシュアも以下のように述べて、いのちに至る狭き門から入る者が少ないことを述べています。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 7章 13~14節

13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。

そして、そこから入って行く者が多いのです。

14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

「聖餐」のための七つの瞑想

●「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」とされているにもかかわらず、私たちは、何と目に見えるもので判断することが多いことでしょうか。目に見える祝福、目に見える数量、目に見えるこの世の価値観によって、物事の真偽を判断してしまうのです。しかし、「いのちへの道」は「狭く」、その門は「小さく」、さらに「それを見いだす者はまれです」とは、まさに驚きのことばです。ですから、目に見えるもので、人の目を恐れたり、自分を恥じたりしない信仰の構え(訓練)が必要なのです。「人の子」イエシュアは神から遣わされた御子です。この方にこそいのちがあります。この方の語ることばこそ永遠不変の絶対的な「真理」なのです。

(2) イエシュアのほかにはない

●このところ、空知太栄光キリスト教会でよく歌っている賛美の歌詞を最後に紹介したいと思います。イエシュアこそ私たちにいのちを与えることのできる唯一の方であり、この世にある多くの宗教の中の一つでは決してありません。「唯一無二の救いの御名」なのです。

#イエシュアのほかにはない

その御名のほかにはない
イエシュアの御名だけが
唯一の救いの御名

#大いなるイエシュアこそ 誉れを受ける方

大いなる主に向かい賛美を
ささげよ 声上げ
イエシュアに イエシュアに

#地上ではあなたのほかに

心満たすものは何もない
いのちより勝るあなたの
とこしえの愛があるから
迎えに来てください 花婿イエシュア
迎えに来てください

●イエシュアの「御名」(=イエシュアご自身のご性質とその働きを表わす巨大なフォルダ)を心から賛美しつつ、御霊によって、さらなる「聖餐」の奥義について、より深い理解を得ることを尋ね求めたいと思います。

2017.10.8